

泉

いずみ

―目次―

表紙 「信州屋閉店へ」三頁参照

百折不撓 野呂大悟

不屈の店主・後藤さん 野呂美道

チャット君でお茶を濁すな 野呂美道

広島研修①三輪車 野呂美道

連載「私の出会った神様たち⑳」

ともに歩み 命に寄り添う④ 浄香

掲示板・お知らせなど



開店から30年、営々と続けてきたそば屋「信州屋」も閉店することになりました。左は店主の後藤孝市さん、右は花束を送った前坊守

手打ち蕎麦 一筋に生き 長き道
みじかくもあり のれん終えぬ 博子

朝晩は少しずつつ秋の涼しさがやってきました。季節も秋まっしぐら。読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋など、暑さも峠を越して、これから活発に心も体も動けそうです！コロナもインフルもありませんが、負けずに秋を満喫したいですね。

さて、今この原稿を書いているのは秋のお彼岸の中日。お彼岸は、平安時代から存在している日本独特の風習だそうです。仏教の世界では、極楽浄土（お浄）を「彼岸」と言い、今私たちが生きている世界（娑婆）を「此岸（しがん）」と言います。仏説阿彌陀經（ぶつせつあみだきょう）では、「これより西方、十万億の仏土を過ぎて世界有り、名けて極楽という（ここから西の遙かなたに極楽浄土はあるのです）」と説かれているように、太陽が真西に沈む春分と秋分の日には人々は極楽浄土に想いを馳せ、全ての人が最後には西の彼方にある極楽浄土にたどり着くことを願い、ご先祖の方々やご縁のある方々のことを思い、手を合わせ、今ある命に感謝をしながら、お念仏を唱えてきたのではないのでしょうか。



上の写真は、安泉寺の庭に咲く彼岸花。毎年、お彼岸の時期に必ず咲きます。桜のように、天候や気温で開花が前後することもなく、どれだけ暑い日が続いても、雨が続きうと、必ず彼岸に咲く彼岸花には、ある特徴があります。それは、葉っぱがない。正確には、葉っぱは冬から春にかけて成長し、彼岸花が咲くための必要な養分を土の中に吸収し続けていきまます。そして花たちは、葉の存在を知ってか知らずか、秋の彼岸になると見事に咲き誇ります。

彼岸花の一生も私たちの一生も一緒ですよ。今命があるのは、私たちが知らない多くの方々（ご先祖様）の命のご縁があったから。そして、今生きているのは、見えることでも見えないところでも、数えきれないご縁の中で支えられているからだと思えます。

先月の寺報でも、永代経での荒山淳師のお話をご紹介したように、自分の命は自分勝手に生きるための命ではなく、多くの人々や亡くなったご先祖の方々に支えられ生かされている命だと、彼岸花を見て改めて教えられました。

日々の仕事や生活の中で、常にそのような事を思い、願い、生きることには難しいかも知れませんが、春と秋のお彼岸には、少しだけ多忙な日々から歩みを止めて、そのような事に思いを巡らしながら、今の命に想いを馳せるのも良いかもしれませぬ。

◆9月のある日、私は妻と共にお世話になった、中川区役所の東にある、小さなそば屋「信州屋」を訪れた。30数年、そば屋を営んできた店主の後藤孝市さんが、病気のため、店を閉めることになった。

◆後藤さんとの出会いは次男の友人の親父が、えらく熱心にキャベツの切り方を講釈していたことに端を発する。聞けば、そば屋を営んでいるとのことだった。その味に魅せられた私は何度も店を訪れた。

◆後藤さんは学校を卒業後、そば屋で修業をした。大将が事故死したのち、店を継いで「信州屋」を名乗った。区役所の東に小さな店を開いた。役所の職員や、近くの銀行員たちが、昼食時によく来てくれた。

◆土地のことやら、税金のこと、融資のことなどよく相談に乗ってくれた。店は近隣のひいき客で繁盛した。◆しかし、後藤さんは、それだけで満足しなかった。役所が休日の土曜日を店も休みにして、出張そば打ち道場を開講した。当時、私の勤務する高校では「土曜講座」と銘打って、市井の人たちに講師になってもらうカリキュラムが組まれた。

◆渡りに船と、後藤さんを講師に「そば打ち講座」を開講した。これが高校一の人気講座になって、後藤さんは張り切って講師を務めた。◆私が高校を退職しても、安泉寺でソバ打ち講座を続けた。そして、地域で行う「環境保全活動」とタイアップして、毎年数十名の規模で、大人から子供まで、楽しく「そば打ち講座」を続けた。

◆コロナになって数年、講座は頓挫していたが、今年再開しようという段階になって、後藤さんの身体は癌に侵された。それでも

不屈の後藤さんは、抗がん剤を服用しながら、そば屋を続けていたが、体力の限界を感じて、ついに閉店することになった。

◆残された、そば打ち道具の一式を私に託したいと申し出た。技術もセンスもないド素人の私ができるわけもない。断わろうとしたが、あまりに忍びない。後藤さんは写真の様に、安泉寺でそば打ちをしている時が、人生で一番楽しい時だったと述懐した。

◆多くの人たちにそば打ちの楽しさを教え、打ちたてのそばをほおばる彼らの笑顔が何よりのエネルギーの素と言っていた。

◆数万円もするそば打ち道具を私はもらい受け、へたくそながら、そばを打ってみようと、今、修行中である。

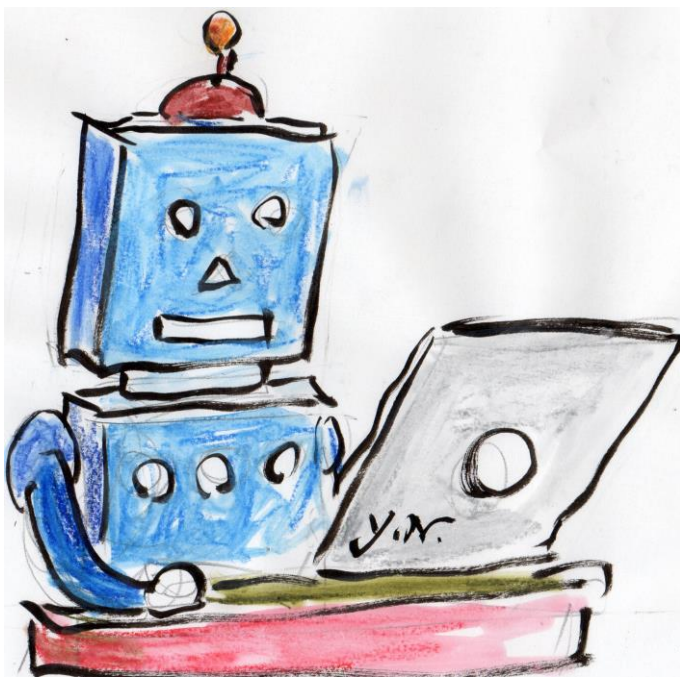
後藤さんには遠く及ばないが、みんなと楽しくそば打ちができる日を夢見て頑張るつもりだ。



そば打ち講座（安泉寺にて）

◆今、話題のチャットGPT（以下チャット君）について物申す。とても便利なものが出てきた。しかし、人間の持つ創造力や、芸術性をどこまで表現できるのか私は懐疑的だ。◆そもそも、それらは、人間のひらめきの産物であって、理屈で突き詰められるものではない。偶然性や、本人も気づかないところで、天が満を持して発するものだからだ。◆例えば、モーツアルトの天衣無縫の音楽は、誰にもまねができないと私は考えている。チャット君はモーツアルト風な音楽ならいくらでも作曲できるだろう。しかし、独自の芸術性を持った作風は決してできないのである。◆いや、そうではないと反論する読者は多いだろう。しかし、チャット君は、今までの人間の英知を総合した答えしか出せないものであり、人間を超える創造力（モーツアルトを超えるもの）を啓示することは無理だと私は思うからだ。◆平均的な、当たり障りのない、優等生的な文章を作り出すことはチャット君にとっては得意分野だ。そこそこ面白い推理小説を作り上げるのも朝飯前だろう。◆しかしながら私は、創造するときの人間の苦しみや、喜びや、達成感や、生きがいを尊く思っている。時間はかかるが、創造する過程が私にとっては生きがいなのだ。◆結果は大したことはないかも知れないが、悪戦苦闘してあるものを創り上げるときはわくわく感や、苦悩を生きがいと考える。その喜びをチャット君なんかには奪われてなるものか！◆現代は効率至上主義の世の中だ。ちょっととした、お決まりの文章はチャット君に任せて、私たちはもっと高度な仕事をせねばならないという、呪縛に陥っていないか？

チャット君をチャット君にしてしまっ、空いている時間をゲームに打ち込む大人が増えるような気がするのには私の杞憂か。◆チャット君はむずかしい論文を組み立てるのは得意だと聞いたが、幼児の質問に答えることはできないとも聞いた。◆私たちは、自分たちで、便利なものを作り出す知恵は豊富だ。しかしながら、自分たちで物を創り出してゆくという、人間本来が持つ、創造性や、ひらめきの醍醐味を、チャット君に奪われないように、自分で物を考え、自立的に生きられるように、彼に負けない努力を払わねばならない。◆世の中、効率だけでは決して成り立たぬことを身をもって感じ、証明しようではないか。チャット君でお茶を濁すな！



◆8月の広島研修で撮影した写真について思うところを述べる。今回は第一回。十二月号まで連載する。

◆写真は、原爆資料館で撮影したものだ。幼い兄弟と、その前に焼けただれた三輪車が置かれていた。

◆一目瞭然、この三輪車に乗って、兄弟は毎日楽しく遊んでいたに違いない。「お姉ちゃん、ずるいよ、今度は僕の番だい！」と泣く弟の声が聞こえてきそう。



◆平和であれば、どこにでも見られる幼子たちの繰り広げる光景だ。

◆その平和なひと時を一瞬にして奪ってしまったのが原爆である。恐らくこの二人は被爆して亡くなったのであろうか。どんな悲惨な死に方をしたかは

分からない。家族も亡くなったであろうと想像する。残されたのは、爆風で無残な姿になってしまった三輪車。でも、躯体は実にしっかりと原形をとどめている。◆この写真を見て、兄弟の幸せを奪った原爆への怒りが込み上げてきた。そして三輪車は静かに兄弟の幸せな日常を語る。きれいに形が残っていることと、二人の端正な記念写真が絶妙にマッチして、静的な抗議の図を完成している。◆数々の

壮絶な写真や絵が私を大きく刺激して、思わず目をそむけたくなるような展示物が多かった中で、この写真と三輪車は私にとっては異彩を放っていた。◆戦争のむごたらしさを表わすのに、そのものずばりの絵や写真も確かにインパクトが強いが、それと逆行するように、被爆前の幸福なひとときを紹介することで、より悲惨さを力強く、静かに訴えているように私は感じた。幼少時、私も妹とこれとそっくりな写真を撮ってもらったことを思いだし、悲嘆にくれた。(続く)

帝王と乞食②

◆お前はどう思っているかは知らないけれども、おじさんは見てのとおりのがないたき大工だ。はんでんを着ているからわかるだろう。家に帰れば五人の子供がいるんだ。とてもお前を家に連れて行ってやることはできない。「まるで人の気持ちを見過かされていくようにしたね。(笑い) ◆「甘酒ぐらいは何杯でも飲ませてやる。それ以外のことはできないよ。」いまだに覚えています。凍え切った身体に熱い甘酒がきゅーっとしみてゆく感じを。痛いほどの熱さが、こうしてお話をしていてもよみがえって来るのです。◆あとでおじさんはこう言ったのです。「しかし、それだけではあまりにもお愛想がないから、一つだけおじさんはおまじないを教えてやろう。こういう言葉があるんだよ。『埋葬された帝王よりも、生きてる乞食が素晴らしい。』死んでしまった王様よりも、乞食として生きていたほうがいいのだ、ということですよ。「人から物をもらって食べたって、おいしいなと感ずるのは命があるからそう思えるんだ。お前はこの言葉を暗唱して、今度死にたいと思う時があったら、この言葉を百回、声に出して繰り返し返してみな。そして、それでもまだ死にたいのだったら、それはお前の寿命だからそれはしょうがない。」ということ

のです。◆そして、また死にたいことがありました。前は川に入って失敗したから、今度は山に行つて死のうと、山の中に入つてゆきまして、木の枝ぶりの良いのを探しまして、首を吊ろうと思いました。◆良いのが見つかつて、箱を持ってきて、上に乗っかり、ロップをひっかけました。◆それなのに僕は死ねなかった。絶対死ねるはずですよ。絶対僕ははずれる心配はないわけです。これだけ深く、ひっかかりが良いわけですから。(と、大きな顎を突き出す。笑い) その僕がなぜ死ねなかったかというと、箱を蹴るもう一步のところでおじさんから教わった先ほどの言葉を思い出したからなんです。「埋葬された帝王よりも生きてる乞食が素晴らしい。どうせ死ぬにしたって、あれだけ甘酒をこちそうしてくれたおじさんの言ったことだから、一回だけ試しにやってみるか。」という気持ちでやりまし

(続く)



ともに歩み、命に寄り添う

この世

第四回 此岸の果てを知る

浄香

どうしてあの時、もっと早く検査をお願いしなかったのだろう。父の様子がいつもと違っていたのに……。当時、父は透析通い。時々「しんどいから透析には行きたくない」と言うようになり、やがて「背中が痛い」と言うようにもなり、食欲が落ちて少し痩せました。透析を始めた時から続けている看護師さんとの交換日誌に詳しく父の症状を書いていましたが、「血液検査では異常ありませんでしたよ」との返事。二日に一回は透析室の先生や看護師さんに診ていただいているという安心感から、父の様子に不安を覚えながらも、時は過ぎていきました。ところがある日、父が「しんどい時に鳴らすベルを買って。鳴らしたら部屋にすぐ来てくれる？」と言うのです。父の容体は絶対におかしい。そう確信し、あらためて「検査をしていただきたい」とお願いしました。

結果を伺うために私は透析室へ。言われたのは「心臓弁膜症です。透析患者で八十歳を超えては手術に耐えられませんが、そもそも引き受けてくれる病院がありません。余命は約半年。今から覚悟しておいたほうがいい」という想像もつかない結果でした。手術ができないと言われても、私は納得できません。ネットで「心臓弁膜症・透析患者」などあらゆ

るキーワードで検索しましたが、調べれば調べるほど難しいことが分かってきました。心臓弁膜症といっても、父は透析に通い、テレビを見たり読書をしたり。「秋には奈良に行きたいね」などと言いながら、庭の柿の木を眺めたりしています。そんな父を見ながら「余命半年だなんて信じられない。私は父に何をしてあげられるの？」と考える日々。そこで心臓が専門の循環器の先生のご意見も伺うことにしました。今後の起こりうる症状をお聞きすると「朝、起きたら亡くなっていたり、お風呂で亡くなったりすることもあります。発作が起こったとき救急車を呼んで病院に運んでも、モルヒネで緩和ケアすることしかできません。お父さんのそばにいて看取るのがいいかもしれません」とのこと。いつ起こるか分からない発作にビクビクしながら、私一人で父を見守る勇気はありません。私は泣きながら「素人の私は先生や看護師さんとは違うのです。一人で見守るなんて怖くてできません」と不安な気持ちを吐き出しました。それに対して先生のご返事は「プロも素人も関係ありません。人の命を看取るとは、そういう問題ではないのです。お父さんにとっては、娘さんが一番のプロなんですよ」。翌朝から、私は目が覚めると真っ先に父の部屋に行き、「ああ、今日もお父さんは生きています!」「まだ大丈夫」と安堵し、御仏さまに手を合わせて感謝する日々が始まったのでした。



10月の行事予定

和讃講

一日(日)

土曜キラリ

七日(土)

別院法話(老僧)

九日(月)

遺族会追弔会

十日(火)

蓮ワーク・環境保全代表者会

十四日(土)

文芸クラブ例会

十九日(木)

写真クラブ例会

二十一日(土)

仏教会(誓光寺)

今月の掲示板

別れる時の悲しみの大きさは、愛情の深さの証明である。

だが、悲しみを恐れていたら、何も愛することはできない。

上の言葉(掲示板)は、27年前、私の発行した学級通信の中の言葉です。久しぶりに頁を繰っていたら、この言葉に出会いました。「でんでんむしの悲しみ」という童話を思い出しました。

いずみのほとり

◆防災士の荒井佐知子さんの記事が中日新聞の全国版に載りました。本人の了解を得て掲載します。◆荒井さんとは、美和町の防災講演会でお会いしました。東日本大震災の被災の経験を見事なイラストを交えて、お話ししてくれました。◆荒井さんは、一念発起して防災士の資格を取り、海部地方の防災活動に尽力しています。10月14日に愛西市文化会館で講演会を予定しています。

震災の語り部の防災士 荒井 佐知子さん(38)



東日本大震災での被災体験を基に、語り部として地元愛知県あま市で防災教室の講師を務める。「避難所に行けば何でもしてもらえるわけではない。事前に知識があれば落ち着いて対応できることも多い」と非常食の確保など日頃から準備する大切さを訴える。震災当時住んでいた宮城県多賀城市のアパート2階の一室で、当時1歳の長女と添い寝していた時に「ゴゴゴ」という地震音が

揺れが目覚めた。主婦仲間から「津波が来るよ」と促され、長女と一緒に車に乗せてもらって近くの小学校に避難したが、「頭の中が真っ白になり、情性で動いていた」と当時を振り返る。4年前に実家のあま市に引っ越し、震災から11年がたった2022年3月11日、地元の防災展で初めて講師を引き受けた。「ただの被災者ではなく、地元の防災を手伝える存在になりたい」として昨年夏には防災士の資格を取得した。小学校への出前講座にも積極的に赴く。南海トラフ地震の発生が懸念される中、「地震が起きてからでは遅い、みんなで事前に備えていけたら」と避難者の視点から発信する日々が続く。(吉田幸雄)